

「底が突き抜けた」時代の歩き方 397

国益のためではなく、我々の世界をより全体的にするためにこそ、
真に報道されなくてはならないこと

作家の曾野綾子が『新聞の報道しない部分』と題して『新潮45』(03・9)で、『事件がどう悲惨なのかを、視覚的にも訴えてこそ、報道の意味がある』はずなのに、顔を背けたくなるような悲惨な写真を多くの読者の目に触れさせないようにすることが、あたかも「人道的」配慮であるかのような空気が日本の新聞社にはあって、それは『報道の墮落と無力化』の始まりにほかならない、と苦言を呈している。彼女は自分が取っている購読料の高い外国の英字新聞に掲載された、『昨年、アメリカで起きた連続狙撃魔の犠牲になった一人の婦人』の一枚の報道写真から、養子の少年と共に逮捕された犯人の男の『毒牙にかかった一人の死者の、たといえようもなく詩的で悲しい死の光景』について、次のように書きとめている。

《被害者の女性は、バス停の傍のベンチに坐っていた。ごくありふれた穏やかな時間だったのだろう。その時、異常な才能を持つ狙撃犯の放ったたった一発の銃弾で彼女は即死した。英字新聞に出た写真では、ベンチから少しずり落ちただけの姿勢で、遺体には白布が掛けられていた。

私が眼を見張ったのは、歩道の縁にはゼラニウムと見える花が植えられていて、その赤とピンクの色がそのまま遺体に掛けられた白布の裾にも滲んでいるように見えたのである。そのあまりにも優しい、言葉の危険性を取って許して言わせてもらえば、完璧に調和の取れた残酷さに、私は深く打たれたのであった。なぜか私はその白布の下の人を中年か老年の初めの女性と思い、その一生を突然奪った見ず知らずの他人の介入の不条理を、その写真を見ながら数分の間、考えたものであった。

この写真は強烈で美しくて悲しい。こういう無残な写真があってこそ、私たちは起きた事件の取り返しのつかない重大さ、人間の確固たる存在が、理由もなくうち砕かれる現実に慄然とするのである。》

彼女は一枚の報道写真に目を止めて、バス停のベンチで『ごくありふれた穏やかな時間』を過ごしていただろう女性の一生が突然、一発の銃弾で断ち切られる残酷さに慄然としたのだ。戦場でもなく、紛争地域でもない、のどかな平和な時間に包まれるなかで、その悲劇は起こった。銃社会のアメリカではありふれた事件かもしれないが、その、よそでいつも起こっている事件が自分の身の上に突然降りかかってくることがあるという人生の不条理について、作家は考え込んだのである。いうまでもなくこの写真は「やらせ」

でも、PR 写真でもない。国益なんぞともかかわりのない、単なる報道写真にすぎないけれども、遺体に白布が掛けられている、けっして残酷とはいえない写真が読者に、人生の不条理の残酷さを際立たせてしまうことがあるということを、作家は述べていたのだ。この先、平穩に打ち続くであろうと誰もが思い込んでいる、人間の一生に不意に待ち受けている無二の裂け目を、一瞬覗き込んでしまったのだ。

更に、日本の新聞が写真を一切載せないシャム双生児についてのいくつかの事例にも触れており、そのなかで、《シンガポールの病院で、数十時間に及ぶ分離手術の途中、出血多量で死亡したラダンとラレーのビジャーニ姉妹》について、こう言及している。《彼女たちの写真を見ると、私たちが友だちと並んだまま頭を横に傾けてくっつき合うような形で頭部がつながっている。

二人の性格は全く違っていた。二人はイラン生まれで既に29歳になっている。一人はジャーナリストになりたいという希望を持ち、一人は弁護士を志していた。

「私たちは一人ずつ違った存在で、自分の生涯の設計についても違った考えを持っているんです。しかも二人の性格はずいぶん違うんです」

ラレーは手術を受けるという強固な希望を述べた時に言ったという。

二人の生活はどんなに不便だらけだったろう。二人はどんなに性格や希望が違おうとも、同じ時間に起き、同じ時間に寝て、イスラム教徒として同じスカーフで頭を包まねばならない。この手術の成功不成功の比率は五十五十だということを、彼女たちは聞かされていた。1952年以来、世界では35例の成功した分離手術が報告されているが、頭部がくっついている双子の分離手術はシンガポールで二例目、成人では世界でも初めてであった。》

作家は、《彼女たちが、手術前にどれほど危険を承知して悩んだか、実はそれほど報道されていない。しかし私にはわかるような気がする。》と書いて、50歳を目前にして視力が急激に落ち、《もう見えない眼に疲れていた》自分自身の体験を振り返っている。《手術を受けて明るい世界に出るか、手術の結果が悪くなくて最悪の場合、完全な暗黒の世界に落ちることになるかは別として、私はもう、その時の現実が嫌になっていたのだ。》と書いて、生命の危険な手術を選択した双子の姉妹の心中を忖度している。その結果、《「マラソン手術」と報道された二日以上に及ぶ長い手術の途中で、姉妹は手術台の上で死亡した。そして生まれて初めて別々の棺に納められて故国に帰った。》また、《人為的に一人を犠牲にしなければ、一人の人間を救えない、という絶体絶命の立場におかれているように素人目には見える》アルゼンチンの双子の事例にも、筆を及ぼしている。

《アヤラとジャヤラ・ラタンという34歳になる女性の双生児》の別の写真については、こう述べている。《二人の胴体はウエストと子宮の部分でつながっている。足は二人で二本、手も二人で二本、のように見えるが、U字型に曲がった胴体の両端に二人の頭は

についており、姉妹はそれぞれの手足の先にゴムのビーチサンダルを履かせて、U 字型の体を浮き上がらせている。だから頭部は地上 7、80 センチの高さにある。

二人はインドの西ベンガル州の貧しい農家に生まれた。二人の存在がこうして明るみに出たのは、もちろんビジャーニ姉妹の死が契機になっているが、二人の写真が公開されたのは、姉妹がアーメダバードの何かの祭りに出演するためにやって来たからである。出演と言っても、歌を歌ったり踊りを見せたりするためではない。好奇心に満ちた人々に、彼女たちの体そのものを見せものにして、お金をもらうためである。日本にも戦前にはそうした人々がいた。

姉妹は眉間に縦皺を寄せ、痩せており、ほんとうに貧しさと不幸を象徴するような表情をしている。しかも彼女たちがいるのは背後にボロ布で作ったほっ立て小屋のある空き地である。小屋には鍋や紐やボロ、彼女たちのいるでこぼこの土間は石ころだらけで、羊の糞のように見えるものもある。

しかしこの二人は、自分たちと、6 人の兄弟・姉妹を食べさせるために自らすすんで自分たちの体を「さらしもの」にする道を選んだのである。

姉妹は恐らく学校へも行っていない。字も読めないかも知れないし、掛け算もできないかも知れない。しかし二人は、なまなかな人には得られていない哲学をきちんと持っていた。

ビジャーニ姉妹が、危険を承知で手術を受け、死んだことを聞いてショックを受けた、と二人は語った。しかし彼女たち二人は、自立をあくまで追求しようとしたビジャーニ姉妹たちとは別の考えを持っていた。

「もし神が、私たちをこのような姿にお造りになったのなら、そのままが私たちの生きるべき姿なのです。ずっといつまでもね」

これらシャム双生児たちの写真がなかったら、私はどうしてこれだけのことを考えられたろう。自由に個として生きることの重い意味と、つながれた人生の苦しさとうしさの双方を、私は写真によって考えさせられたのだ。》

シャム双生児たちの写真に新聞で接して、作家がいくつかのことを考えてこられたとするなら、いまこうしてその文章を書き写しながら、私が考えようとしていることも、作家が文章にしてくれているからにほかならない。《この世で起るすべてのことは、人間が共有する大きな資産である。その意味を知り、人間に対する基本的な礼儀さえ心得ていれば、いかなる残酷な事件でも、必らず報道していい角度というものが見つかるはずである。》と文章は締め括られているが、その末尾は冒頭の、読者に配慮して残酷な写真はできるだけ載せないようにしている日本の新聞に対する苦言の結びにもなっている。作家のその考えにはもちろん、異論はないどころか、《この世で起るすべてのことは、人間が共有する大きな資産である》し、本当に共有資産にしていかなければならないと思うが、《これらシャム双生児たちの写真がなかったら、私はどうしてこれだけの

ことを考えられたろう。》と作家自身書くように、シャム双生児たちの写真や報道がなければ、作家は彼らについて考える機会を与えられなかったことも確かなのである。

このことは、メディアが「あること」について報道しなければ、我々はそのことについて知らないままであり、したがって考えることもなく、「あること」はなかったに等しくなってしまうということを物語っている。狙撃犯の銃弾で倒れた女性の遺体に白布が掛けられていた写真が新聞に掲載されていなければ、記事として報道されたとしても、その写真から多くのことを汲み取る者が現れる機会を持ちえないように、事件そのものが記号化された犯罪の一つとして膨大な事件報道の中に埋没させられていき、事件があったということ自体がどうでもよいこととして人々に処理されていくようになるだろう。シャム双生児たちの写真についても同様のことがいえる。いうまでもなく彼らの生存もまた、一つの大きな世界を構成している。たとえ世界中で滅多にないごく少数の事例であるとしても、ベトナム戦争時の枯葉剤や、湾岸戦争時の劣化ウラン弾の影響によるものであれ、よらないものであれ、彼らのそうした存在の仕方は我々にとって想像をはるかに絶しているという意味で、我々はその事実を謙虚に受けとめる義務も必要もあるからだ。

曾野綾子がここで取り出している報道写真の事例には作為が感じられないし、作為の必要もないから、《この世で起るすべてのことは、人間が共有する大きな資産である。》と、正当かつ無邪気に断言できるけれども、「戦争広告代理店」からも明らかなように、国益の絡んだ紛争地域では、一方の戦争の正当性を強調したり、戦争の勝利に結びつけるために、情報操作が当然のように罷り通っており、そこで《起るすべてのこと》が取捨選択されて報道されることによって、《人間が共有する大きな資産》は大きく損なわれる事態に陥っている。つまり、一つの出来事を大きくクローズアップして強調することは、他の出来事を隠蔽することにほかならず、裏を返せば、ある事実を隠蔽するために別の事実を前面に大きく押し出すという手口が、いまや常套になっているのだ。

イラン人の映画監督モフセン・マフマルバフが、世界中の人々はバーミヤンの世界最大の仏像の破壊に関心を寄せ、同情したのに、アフガンの地で進行している飢饉によって100万人の餓死者が出ているという事態は世界中のどのメディアも取り上げず、したがって関心も寄せないし、同情も集めない。《現代の世界では、人間よりも像のほうが大事にされるというのか。》と必死に問うていたが、バーミヤンの石仏破壊報道は別にアフガンでの悲惨な飢餓状態を隠蔽するための、作為的なものではたぶんなかったにもかかわらず、西側のメディアは石仏破壊を大きく取り上げることによって、結果的にアフガンの悲惨な飢餓を隠蔽してしまっていたのだ。石仏破壊への関心が飢餓への関心を排除していたのであり、関心の党派性が無意識のうちに発揮されていたといわねばならない。

もし現代のメディアに作為なき関心の偏向が大きく巣くっているとすれば、そのこ

とは先のシャム双生児たちの写真の場合にも貫かれているかもしれない。枯葉剤や劣化ウラン弾などの明確な被害によるものではないとすれば、シャム双生児たちの写真報道は彼らのような存在が発生する原因や極貧の環境に目を向けず、対策の取り組みを素通りしている点で、隠蔽していることになるのかもしれない。照明を強く当てれば、そこには必ず陰影が生じるという意味で、意図があるなしにかかわらず、メディアには無意識のうちに情報操作が含まれていることにたえず自覚的でなければならない。しかし、情報操作がどうしてもメディアに含まれてしまうなら、意図的に情報操作を行うことにすぐ手が伸びてしまいかねなくなる。メディアの情報操作に自覚的であるよりも、どうせメディアが情報操作を免れない性格に貫かれているなら、情報をいじめることに罪責感をもたなくなっていくようになるのは、熾烈な報道合戦の中では不可避のように思われる。

TBS のワシントン支局長である金平茂紀が『報道かプロパガンダか 「帝国」のメディアをみる』(『世界』03・7)のなかで、CNN が4月17日と20日にわたって、バグダッドの動物園を放映して動物たちの危機を訴えているレポートについて、次のように述べている。《私は、それらのレポートをみて、言いようのない思いにとらわれた。唐突なようだが、ハナ・アーレントの『全体主義の起原』のなかの一文を思い出した。

「一人の人間が嘗てこの世に生きていたことがなかったかのように生者の世界から抹殺されたとき、はじめて彼は本当に殺されたのである。」

イラク市民の被害は報じられないことによって、なかったことにされているのではないか。バグダッド動物園の動物たちの命を思いやる心情と、イラク市民の被害に対する想像力のすさまじい欠如。この隔たりを前にして、私たちは一体何と云えはいいのだろうか。》

バグダッド動物園の動物たちの危機を報道することによってイラク市民の危機を見えなくしてしまうという構図は、バーミヤンの石仏破壊を報道することによって飢餓のために破壊されているアフガンの現実を見えなくしてしまうという構図と、全く同じである。石仏破壊を報道するなら、その先に見えているものも同等に、あるいはそれ以上に報道する必要があるのではないか、という同じ問いが、動物たちの危機が指さすその先に向けられている筈だ。動物たちの危機の報道に優先して、イラク市民の被害を報道しなければならない、ということではない。アメリカによる凄惨なイラク攻撃の中で、市民も動物たちも共に危機に瀕している現状を報道しなくてはならないということだ。イラク市民の被害を報じて動物たちの被害を報じないのも片手落ちである。人間たちの都合で無理矢理檻に囚われている動物たちが、人間界の出来事に一方的に巻き込まれて、わけもわからず生命の危機に瀕している有様こそ、最も象徴的に動物的な人間界を映しだしているのは間違いない。

金平氏はレポートのなかで、今回のイラク攻撃の大きな特徴として、《圧倒的な破壊

力を誇るハイテク兵器の駆使による「衝撃と恐怖」(Shock and Awe)戦略に基づく作戦の実施、国連の承認によらず、アメリカの呼びかけに応じた「有志連合」(...)による攻撃の実行、アメリカへの潜在的脅威を予め取り除くという先制攻撃理論＝「ブッシュ・ドクトリン」の初適用、などいくつかの点》を列挙した上で、《「情報戦・心理戦」が新たな実践の段階に入った》ことを取り上げ、《今次のイラク戦争は、その全体がひとつの巨大な「情報戦」となっていたといえるのではないか》と指摘する。その「情報戦」のなかで、《米メディアの報道ぶりについては、世論調査の結果でも、74%のアメリカ人が「すばらしい」「よい」報道だった、と評価している。米メディア自身の自己評価も、軍とメディアはお互いに有益な仕事をした、というのが大勢である。》

「従軍」取材や、最新テクノロジーによるリアルタイム報道などが突出した米テレビ界で、《「フォックス効果」と呼ばれる現象が吹き荒れた》ことも取り上げている。《フォックス・ニュースと言え、テレビ画面の左上に常に星条旗のロゴマークがひるがえっている「愛国心」を前面に出した攻撃的な編集方針で知られる局である。フォックス・ニュースを含むケーブル・ニュース専門局は、イラク戦争のさなか、軒並み視聴者数を増やした。それも半端な増加ではない。フォックス・ニュースは288%増、CNNは334%増、MSNBCも379%増という驚異的な伸びとなっている。それに比べて、NBC、ABC、CBSの三大ネットワークはNBCを除いて大きく落ち込んだ。最大の要因は、最新テクノロジーを駆使した戦況の24時間リアルタイム・カバーに視聴者が釘付けになったことだ。このフォックスの圧勝に刺激されて、他局もニュースの編集方針を再考し始めた。MSNBCは、番組のコメンテーターとして、イラク戦争開戦前に、過激な愛国主義者として知られるトークラジオのパーソナリティー、マイケル・サベージを起用した。CNNも「国益」を重視する編集方針に次第に転換していった。例えば、反戦集会の報道は必ず戦争支持派の集会と対^{つい}にして報じるようになった。こうした傾向はテレビ・メディア全体に大きな波及効果を及ぼしており、「フォックス効果」と呼ばれているのである。》

この「フォックス効果」をもたらした世論動向の背景について、外務省を辞めてアラビア語通訳者を勤めている新谷恵司が『世界』(03・6)で、次のような発言を紹介している。米国メディアの強い偏向報道についてアラブ側のメディア、アルジャジーラから聞かれた米ブルッキングス研究所のスティーブ・ハースは、「戦争の時にはいつも『興奮した大衆』が存在するものだ。米国のメディアはそういう人たちに依存せざるを得ない。ジャーナリズムの方向性を一つになびかせる風がある。彼らは、報道とはいっても耳障りのよいニュースだけではない、ということがわからない」と述べ、また「なぜ米国では戦争支持率が高まる一方なのか」という、ドーハのキャスターの質問にワシントンのマハダウィ特派員は、「米国のメディアは、政府高官の声明や軍の発表以外の情報、例えばイラク側の立場表明などを、ほとんど伝えていません。かつて戦争に批判的

な見解を持った米国人の退役した将軍を出演させた局がありましたが、視聴者の非難を浴びて、その元将軍はもはやテレビに出演できなくなりました。」と答えた。

新谷氏は続いてこう述べている。《米四大ネットワークのひとつ FOX テレビは、戦争礼賛、戦況の良いことだけをプレイアップするという手法で、全米一の視聴率を稼いだ。そしてそれは CNN とて例外ではなかった。かつて世界で最も影響力のあった CNN は、もはや湾岸戦争時の勢いをもち得なかった。米国内での話ではない。国際的にである。80年代、彗星の如く登場したこのチャンネルは、衛星テレビによる24時間ニュースの草分けであり、迅速かつ比較的客観的な報道で世界中の政治家、ビジネスマンが競って選択したものだった。湾岸戦争の時、我が国のある首相も、遅くて不正確な外務省情報よりは CNN がましと重用していた》ほどであるのに、《その CNN が突然ある特定の見解を押しつけがましく主張するようになり、著しく報道の中立性、客観性を欠きはじめてしたのは、9月11日事件の直後からだ、と英・日同時通訳者の A さんは言う。A さんやその同僚の CNN 同時通訳者は憤慨している。「こんな（一方的で）頭にくる話、通訳したくないと思うときがあるのです」と。私は A さんにその話を原稿にしてもよいか、と聞いた。彼女は「本当のことなだから構いませんよ」と快諾してくれたが、どこで爆撃されるかわからない恐ろしい世の中である。匿名とさせていただきます。》

アンドリュー・デウィットと金子勝の共同執筆の連載『今月のブッシュイズム』（『世界』03・12）によれば、《ブッシュ政権は、イラク占領に関してもっと明るい話題を報道するようメディアを脅し、問題を遠ざけようと試みている。これらのブッシュらしい工作には、常にブッシュイズムを追従的に支持してきたフォックス・ニュースは含まれていない。》として、次のような「フォックス効果」に言及している。

《国際政策の姿勢に関するプログラムによって、テレビニュース視聴者についての広範な研究が発表され、フォックス・ニュースの視聴者は全てのニュース視聴者の中で「最も誤った認識」を持っていたことが分かった（10月2日、<http://www.pipa.org/>）。フォックス・ニュース視聴者の多くは、大量破壊兵器が既に発見された、フセインとアル・カーイダは親密に一致協力していた、もしくは海外のほとんどの人々がブッシュの対イラク戦争を支持していたなどと信じていることが分かった。我々が『反ブッシュイズム2』のフォックス効果に関する記述で指摘したとおり、他のメディアは、戦争の最中とその直後はフォックスの度を越した愛国主義の真似をしようとした。しかし、イラクにおける混乱と大量破壊兵器の不在という現実が十分に理解され、ブレア政権の追跡をする英国メディアを見て、米テレビ放送網は再び、以前に比べてやや批判的なトーンで報道するようになってきた。

イラクからはあまりに多くの悪い知らせ、特に恐ろしい自爆テロの頻発化などが報じられるため、ブッシュ政権は、10月初旬に、メディアがイラク占領の成功を全て無視し、悪いニュースばかりを伝えていると苦情を言った。その結果、いくらかの成功を得

た。予想通り、真摯な米軍兵士がイラク市民を助けるといった陳腐なプロパガンダを前面に押し出した記事の数が増えた。しかし、今のところイラク戦争時のフォックス効果ほどには成功していない。アメリカでも、イラクで毎日のように起こる米兵に対する爆破や銃撃、そして頻繁に起こるイラク市民や制服を着た人員の偶発的な殺人が、つぎつぎと伝えられているからだ。そのために、ブッシュが望む「気持ちの良い」ニュース報道の継続的なキャンペーンは度々寸断されてしまう。》

さて金平茂紀は、米陸軍省が96年8月17日付で作成した「情報作戦マニュアル」から、今回のイラク攻撃での「情報戦」についてのアメリカ軍当局の考え方を読み取ろうとしている。《この文書は、21世紀には、情報が「戦争の勝利にとっては通貨のごとく貴重になる」と断言し、ニュース・メディアについても、軍事情報環境(...)のきわめて重要な要素だと位置づけている。

「メディアの取材は、軍事作戦の戦略的な方針や範囲を劇的に変化させる。はっきりしているのは、記事に書かれたことの影響で、さらにはより重要なことだが、内外のテレビ・ニュースの映像情報によって、アメリカの内外政策、ルワンダ、ソマリア、旧ユーゴスラビアでの軍事力行使に関して、直接的かつ迅速な影響が及ぼされたことである。」

「情報作戦マニュアル」はこのように分析した上で、情報支配(...)が軍事作戦の勝利に直結するとして、ニュース・メディアにいかに対応するか、市民への宣撫作戦、広報活動などの重要性を説いている。ここで重要なことは、情報の真偽が最重要視されているのではなく、作戦の勝利のために情報がいかに評価されるべきか、が最重要視されていることである。「メディアによる戦取材は、作戦遂行と国家戦略の達成にとって中枢に位置する。」この考え方に従えば、なるほど、今次のイラク戦争でのメディア対応策が導き出されて当然、と納得させられるのである。》

「メディアによる戦取材は、作戦遂行と国家戦略の達成にとって中枢に位置する。」とみるのであれば、軍当局は進んで「メディアによる戦取材」の便宜を図ればよい、ということになる。その便宜が今回のイラク攻撃のなかで、大規模な「従軍」報道として実現されたのである。《メディアに対する取材規制や制限が大きな批判を浴びた湾岸戦争や対アフガニスタン戦争に比べ、今次のイラク戦争では、アメリカ国防総省が、外国のメディアおよそ120人以上を含むおよそ700人という大規模な「従軍」(...)報道を認めた。国防総省が認めた「従軍」取材に参加した報道陣は、アメリカが圧倒的に多いのはもちろんだが、イギリス80名、日本30名、ドイツ5名、イタリア3名、スペイン10名、韓国4名など、計29カ国に及ぶ。とりわけ、米メディアが、この「従軍」報道に多数参加したことによって、戦争報道の「主流」が従軍記者・カメラマンからの映像・情報によって形作られたことの意味は大きい。先に紹介した国防総省の「情報戦マニュアル」に従えば、アメリカは、メディアに対して、このイラク戦争を「然るべきストーリー」として報じさせることを決意したのである。その決意は、メディアの

性向を十分に研究し尽くしたという自信に裏付けられている。》

「従軍」取材には当然、《報道の中立・公正・独立と明らかに抵触するルールを承諾する条件が課されていた》けれども、《従来のメディアの常識を大きくはみ出すほどの「アクセスの自由」が認められていたとされる》。金平氏はワシントン時間3月23日、午前一時すぎ、たまたま見ていたCNNの《アロン・ブラウンというアンカーマンの生番組の最中に、イラク南部ウムカサルでイラク軍と対峙する米軍海兵隊の最前線の生中継映像が飛び込んできた》、そのときの映像について記している。

《兵士が身を伏せているすぐ後ろに、イギリス SKYNEWS の「従軍」記者デイビッド・パウデンがいる。ハンディ・カメラの前で身を伏せながら戦況の実況中継をしているではないか。CNN をみているうちに、FOX や MSNBC といった他のケーブル・ニュース専門局がどんどん同じ生中継の映像に切り換えだした。CNN の画面には「COMBAT LIVE」(戦闘生中継)という字幕が入りっぱなしになっている。「従軍」はまさに兵士の視線とほぼ同じ位置までアクセスを許す事態になっていたのだ。司会のアロン・ブラウンは、興奮を隠さずにコメントし続けた。

「戦争報道の歴史のなかでこんなことはみたことがありません。これはリアリティ TV ショーではなくて、現実に行き始めていることなのです。テレビのためにしつらえられたものではありません。」

確かに目の前のテレビ画面の中で進行していることは、実際の戦闘なのである。しかし、アロン・ブラウンのこの言葉を聞きながら、私は逆のことを考えていた。今起きていることは、ひょっとして戦争の巨大なリアリティ TV ショー化ではないのか、と。戦争のスペクタクル化。まさに、「然るべきストーリー」に沿ったリアリティ・ショーのように戦争は進行しているのではないかと。これは、テレビを見ている視聴者、テレビでコメントしている出演者、前線で情報を発信する記者・カメラマンを含めて、システム全体が、リアリティ（現実感覚）を奪う方向へ奪う方向へと機能しているのではないかと。このような錯覚にも似た直感に基づいた思いだった。》

「従軍」取材が「情報作戦マニュアル」にあるように、《軍事作戦の勝利に直結》している情報支配の一環であり、「国民の説得のためにメディアは最大限に利用すべき道具である」方向に位置づけられているとして、《「従軍」はまさに兵士の視線とほぼ同じ位置まで》に一体化している事態は、なにを意味するのか。北海道大学助教授の橋本晃は『論座』(03・6)で、従軍取材を認めることは《軍にとって危険性の高い方法だ》が、《しかし、同行する兵士たちに身の安全と食糧を依存する従軍記者は、結果として軍に好意的な報道をすることが多い。イラク軍や民兵との交戦で同行する軍が劣勢となれば、ただちに自らの生命に深刻な影響が及ぶのであり、また多くの記者にとって付き従うのは自国の兵士たちである。「自国が巻き込まれた戦争では、従軍記者は中立的な第三者ではありえない。それは「われわれの戦争」なのだ」という熱狂が記者らを包む

例を、19世紀後半のクリミア戦争以来となる従軍記者の歴史の中でわれわれは十分に目撃している。

このことは事前に十分予想されていた。湾岸、コソボ、アフガンなどでの苦い経験から、軍に対して働きかけをすべく国防総省担当記者、戦争特派員らが設立した団体「軍事担当記者・編集者（MRE）」を設立したサンアントニオ・エクスプレスニュース紙のクリステンソン記者は開戦前夜、「従軍記者による記事10のうち9つが軍に好意的なものとなるだろう。ペンタゴンの政策立案者たちもこのことを熟知しているのだ」と予言していた。（中略）

また、英 BBC など欧州メディアは総じてキャンプになだれ込む難民など一般市民の側に焦点を当てた報道が多かったのに対し、米メディアなかんずく米テレビの報道は、従軍取材でとらえた戦闘シーンや祖国の兵士たちの活躍ぶりを銃後の国民に伝えるものが多かった。現場の米軍司令官らのほうも、ライブ中継を行う米テレビのクルーに、進軍や戦闘の様子を見渡しやすい「特等席」を与えるなどの便宜をはかった。

戦争当事国のメディアとして500人もの従軍枠を与えられたため、バグダッドやイラク北部のクルド人自治区で取材活動を続けた米メディアの記者らは一部にとどまり、大半は軍に好意的な記事、写真、映像を本国および世界に流し続けた。》

金平茂紀は、《戦闘生中継を可能にしたテクノロジーの進化》と、軍事テクノロジーの進化は一体化して発達し、《放送技術は軍事技術である、と言っても過言ではない。》と指摘した上で、戦争報道のテクノロジーについて具体的に述べている。《今次のイラク戦争報道では、ビデオフォンや自動追尾アンテナが絶大な威力を発揮した。ビデオフォンは、先のアフガン戦争でもテレビ記者たちに使用され、画質は劣るが、現地からのリアルタイムの映像音声の中継を可能にして戦争報道の必須ツールになった。装備が比較的軽微なこと（重量約4キロ）がその最大の利点である。また、従軍取材で移動中の車両やタンクからの生中継には、GPS（全地球無線測位システム）装置で放送衛星の位置を自動追尾できる特殊装備つき車両が登場した。（…）従軍した際に使用したフォード製トラックには、上記のGPSおよび自動追尾アンテナを組み合わせた映像送信システム「ブルーモバイル」が搭載されていた。この「ブルーモバイル」は、元来が空母からの送信を開発しているマリタイム・テレコミュニケーションズ・ネットワークが手がけたものだ。そもそも、GPS自体が1970年代から米国防総省が開発研究したシステムである。》

軍事技術の進化にしたがって放送技術が進化すればするほど、そして今回のイラク攻撃のように大規模な従軍取材が認められても、《戦争の悲惨な実相＝リアリティの喪失という問題》がますます浮上していることも、金平茂紀は取り上げている。米ABCテレビの人気報道番組「ナイトライン」でアンカーマンを23年勤め、自らも「従軍」取材に参加したテッド・コッペルは、《遺体や負傷者の映像は放映するべきだと主張した一人

であり、多くの米テレビとは異なり、「ナイトライン」はこうした映像を放映した。(中略)

「戦争の重大さを理解するために、メディアが国民に対して少なくとも言わなければならないことがあります。戦争では人間が死んで負傷している。その死んだ人間の顔を見せるべきです。イラク人であろうとアメリカ兵であろうとです。横たわっている死体やむごい死に方をしたおそろしい場所を見せるべきです。人々は戦争がおそろしい出来事であることを理解しなければならないのです」。

このような主張を公然と行うこと自体が今のアメリカでは稀有なケースとなっている。それどころか、NBC テレビのアンカーマン、ブライアン・ウィリアムスのように「米軍当局はこの戦争を軍事史上もっともきれいな戦争(…)だと言っています」と紹介し、東京大空襲やドレスデンの絨毯爆撃まで引き合いに出して、「これとは正反対のことが今起きています」とクウェートからリポートする類いの報道がほとんどだった。》

大規模な従軍取材が認められる一方で、報道機関そのものが直接爆撃されるという事態も生じた。アメリカにとってフセイン大統領のメッセージを間断なく流すイラク国营テレビは、「敵性メディア」とみなされ、4月8日、米軍の攻撃で停波し、《同時に、バグダッド市内のアルジャジーラ支局が砲撃を受けて、カメラマン一人が死亡した。同日、多くの外国人プレスが滞在するパレスチナ・ホテルが米軍の砲撃を受けて、ロイター通信のカメラマンとスペインの記者が死亡している。アルジャジーラの支局は、このパレスチナ・ホテルとはかなりはなれた位置にあって、「誤爆」の可能性がより少ない場所と言われていた。》

アルジャジーラはカタルに拠点を置き、これまでもオサマ・ビンラディンの声明を放送してきたが、イラク攻撃で《「従軍」報道の外側で、イラク市民の被害や米英軍捕虜の遺体や拘束下の映像を放送したこと》によって、米英軍の反撥を招き、《これを境にアルジャジーラ攻撃がいっそう厳しくなった》。金平茂紀は、《アルジャジーラが、アメリカのメディアが自己検閲、排除した映像・情報を積極的に放送していたことは紛れもない事実である。》と書いているが、このことは、アメリカのメディアが関心を向けなかったところにアルジャジーラがカメラを向けることによって、報道のバランスを取っていたともいえる。しかし、このアルジャジーラ支局や多くの外国人プレスが滞在するパレスチナ・ホテルへの米軍の砲撃は、米軍の監視下でない「従軍」報道の外側で自由に動き回っている報道記者を、米軍がイラク政府と同等の「敵」として取り扱ったことを意味しており、逆に「従軍」報道によって自分たちの側にメディアを取り込んだと米軍が判断していることも映しだしている筈である。

この「敵性メディア」の発想から、ベトナム戦争の報道でピューリッツァー賞を受賞し、91年の湾岸戦争報道で、《CNN 記者として国防総省の退去勧告を拒否し、バグダッド空爆の模様を放送し続けた》ピーター・アーネット記者の解雇もみえてくる。《彼は、バグダッド滞在中にイラク国营テレビのインタビューに「米英軍の戦略は今のとこ

る失敗している」などと述べて、米国内で袋だたきにあい、米 NBC テレビから解雇された。同社は当初、アーネット記者の行動を個人的な見解だとして擁護していたが、「敵に対し頭を下げる行為だ」などという批判が NBC に殺到し、解雇に踏み切ったという。》

イラク国営テレビのインタビューに応じることによって、アーネット記者はイラク情報省にすり寄った、《つまり、米英軍の戦況が不利になっているとイラク側に語ることで、何らかの対価を得ようとしたと疑われても仕方がないという》理由が指摘されたりしているが、金平茂紀は《冷静に考えてみれば、アーネット記者の場合は、熾烈な「情報戦」のなかで、米英軍が不利というような国威を著しく損ねる「利敵行為」を働いたと認定されたことが、追放の最大要因だろう。》と述べ、アメリカのメディアは自国の不利になる内容を徹底的に排除し、代わりに放送したのは、ジェシカ・リンチ上等兵脱出劇であり、《米兵捕虜の故国への帰還とその熱狂的な歓迎ぶりの実況中継であり、前線兵士と故国の家族の衛星中継による「対面」であり、何度も何度も繰り返し放映されたサダム・フセイン像の引き倒しのシーンである。像の引き倒しの直後、ラムズフェルド国防長官》が記者会見で、「イラク国内にいる自由な記者やジャーナリスト諸君に言いたい。これはあなた達が取材をするとてもいい機会だ。これはジャーナリストたちにとって歴史的な機会だ」と注文をつけたことを報じている。

ここで問われているのは「報道かプロパガンダ」かであるが、CBS テレビで永年、軍事を担当し、《アメリカ国内で非常にあつい信頼を集めている》デービッド・マーチン記者が、「確かに私たちの報道は、政府の影響を受けていると思う。政府としては、自分たちの立場を支持する情報は出すが、自分たちの見方に反する情報は出す必要がないんです。でも、それは影響力であって、情報操作ではない。分かって欲しいのは、アメリカ人の記者が戦場でアメリカ軍を取材している以上、勝利を願うのは当然だということです。だからと言っていいことだけを報道するわけではありませんが、私たちも戦争をしている国の一市民であることは間違いないのです」と胸の内の苦しさを打ち明けるのに接して、金平茂紀は、戦争当事国の《アメリカとは違い、アメリカからの情報も、(…)アルジャジーラも、一定の距離をおいて評価することができるという、ある意味で有利な環境にあったはず》の日本のメディアについて、こう疑問を發してリポートを結ぶ。

《……デービッド・マーチンの言うように、アメリカのメディアの記者たちは、結局は、アメリカの勝利を願いながら報道していたのかもしれない。百歩譲ってそれを認めたとしても、しかし、少なくとも、日本のメディアは、イラク戦争においては、アメリカのために情報を發しているのではない。メディアに国籍がある、という考え方には、個人的には承服できない点があるが、現在のアメリカという、「帝国」のメディアの方向とは別個の視点が、それ以外の国のメディアには必要なのではないか。そうでなければ、「帝国」のメディアとパラレルに、今度は「属国」のプロパガンダができあがるだけである。》

2003年12月16日記

